

A・J・マレイ著
『金もなく、恋人もいない』

——ジャカルタの街頭商人と
売春婦の研究——』

Alison J. Murray, *No Money, No Honey: A Study of Street Traders and Prostitutes in Jakarta*, ニューヨーク, Oxford University Press, 1991年, xxi+159ページ

天川直子

本書は、ジャカルタにおける下層階級の女性（街頭商人と売春婦）の日常生活のケース・スタディである。著者の関心は、都市貧困層の日常生活と生き残りのための奮闘、およびジャカルタの「メトロポリタン」文化と支配エリート層が抱いている発展のイメージとの矛盾・衝突に向けられている。

著者はまず、1984年から85年にかけてマンガライ(Manggarai)地区（南ジャカルタ、テベット郡マンガライ町）の露地裏に住み、そこの生活では女性街頭商人が重要な役割を果たしていることを発見し、露地裏の隣人関係は一種の自己完結的な小宇宙を成していることに気がつく。しかし、同時に、若い女性は、ジェンダーやセクシュアリティを規定するイデオロギーとコンシューマリズムにさらされており、その結果、彼女たちが下層地区^(GEP)から離れていくことに気づき、観察対象をブロックMという繁華街のバーに集う自己雇用 (self-employed) の売春婦に移す。そして、ジャカルタの下層階級の女性はそれぞれ与えられた環境に適応して主体的に生き抜いているとの結論に達している。

このような数年間にわたる参与観察によって、著者の理解は積み上げられている。ジャカルタの下層階級の女性の生活について叙述した類書は少なく、モノグラフとしても非常に貴重なものである。

I

本書の構成は以下のとおりである。

序章

第1章 真実と幻想

第2章 大いなるおとぎの国 ジャカルタ
第3章 マンガライ地区の真実と死
第4章 通りで商売している女性
第5章 生活手段としての無秩序
第6章 都市の幻滅
第7章 売春婦たち
第8章 消えゆく者たちと買いだめに走る者たち
結論

第1章では、ジャカルタにおける「近代的」なジェンダーの創出過程と、発展途上国にとっては近代化の象徴でもある都市下層階級の都市における位置づけが示される。本書の大部分を占めるケース・スタディに対する分析の視座が示されている重要な部分である。

本書は、都市下層階級の女性に対して、従来から与えられてきたイメージを検証するところから始まる。「母」という意味で、女性に対する尊称としても使われるインドネシア語の「イブ」(Ibu)という言葉が、下層階級の女性を象徴的に表現するために用いられる場合には、2つのイメージが結びついていると言う。ひとつは、資本主義的発展の無知な犠牲者という売春婦のイメージである。もうひとつは、女神というイメージであり、これは1965年以来、インドネシアの国家イデオロギーが、尊敬はされるものの究極的には無力な妻もしくは母としての役割を女性に課そうとする際に、重要視されてきた。元来、ジャワでは家庭外労働は下層階級の女性のすることであり、主婦でいられるということは中流階級以上の特権として見なされていたこともあって、この試みは成功し、女性の伝統的な役割は、生活部門 (subsistence sector) にあると説いて、女性を家庭の中によりいっそう厳格に閉じこめようとすると同時に、家内空間 (domestic sphere) 自体が矮小化されて「家庭」と同一視されるようになったのである。このようにして、女性の理想的役割が作り上げられるのと並行して、否定的なイメージも作り上げられた。その最も単純化されたかたちが、女神と売春婦という二分法である。このイメージにおいては、女性は「女神の台座の上でバランスをとっているか、さもなくばそこから転がり落ちる」(5ページ) のであり、女性には「まっとうな」(good) 人生と「よくない」(bad) 人生があるという認識を持たせられると言う。

ついで、支配層によって構築された国家イデオロギーと都市下層地区との関係が示される。支配層である欧米で教育を受けた都市エリート層は資本主義的發展を指向し、ジェンダーの創出および時間と空間の商品化 (commodification) を通じて社会を制度化し、各人の日常生活をも支配しようとする。一方、下層地区居住者は、共同体意識を保持しており、その日常生活は自足的な内部活動と強く結びついている。したがって、支配層にとっての真実である資本主義的發展と、都市下層民の自律性との間には本来的に矛盾が生じる。

本書の目的は、経済發展過程で創出されたジェンダーと、より一層の資本主義的發展を求める国家イデオロギーにさらされつつも、自分なりに生き延びる方途を見いだしている都市下層階級の女性たちを描くことであるとされる。

II

第2章では、下層地区の成立過程とその全般的な特徴、およびジャカルタ特別州の行政組織が説明される。ここで著者は、下層地区の特徴を以下の3点にまとめている。第1に、下層地区における多重就労と隣人間の相互依存および寛容さはその人口密度の高さに適応したものであり、下層地区住民の道徳や共同体意識の基礎となっていること、第2に、政治的無関心は下層地区が自給自足的であることからきていること、第3に、都市下層地区は農村とのつながりを維持しているが、「都市農村」ではなくきわめて都会的な特質を有していることである。次いでジャカルタの行政組織が抑圧的国家の延長として略説される。

第3章では、著者が住んでいた1984~85年当時のマンガライ地区の様子と人々のくらしが描かれている。この章の最後で著者は、行政上は同一地区内でも、街道沿いの住民と露地沿いの住民は、社会経済上まったく異なった階級に属していること、そして街道沿いに住む富裕層は、すぐ裏の露地に住む下層民にまったく無関心であることを指摘している。

第4章では、マンガライ地区における性別役割分担が論じられた後に、6名の女性自営商人の日常生活が詳述される。著者は、マンガライ地区の女性はもっぱ

ら自営の小規模街頭商人として経済活動を行っていると述べ、その理由として以下の3点をあげている。第1に、この種の事業は技能・資本を必要としないこと、また、だからここの種の事業は「女性の仕事」と見なされており、育児や調理といった家庭内における女性の役割と現金収入の獲得との衝突を回避できることがあげられる。第2に、ジャワでは伝統的に市場は女性の場所であったこと、そしてマンガライ地区の女性商人のほとんどはジャワ農村部からの移住民であることが指摘される。最後に、この種の商売はライフサイクルや家庭の状況に応じて時間的に融通がきくことが述べられる。こうした点を指摘した後、著者は一般に「家庭性」(domesticity) というイデオロギーが發展するにつれ、女性の生産能力は否定されていき、女性のいるべき場所は世帯内に限定されていったが、マンガライ地区の女性はその貧困ゆえに、日々の生活において確固たる役割を担っている、と結んでいる。

次いで、マンガライ地区の商業活動の全般的な説明の後、6名の女性自営商人の1日の様子が詳細に描き出される。著者はマンガライ地区の下層女性商人に共通に見いだせる特徴として以下の諸点をあげている。まず、労働時間および時間配分が融通無碍であり、商売のやり方も各人の事情によってまちまちであると述べ、次いで女性屋台経営者や露天商人の社会的地位について多少の驚きをもって説明している。すなわち、噂話は単なる楽しみではなく、下層地区の社会生活の重要な部分を占めているために、噂話の場を提供するという意味において、彼女たちの商売は、隣人関係において尊重されるべき地位にある、ということである。そして、彼女たちは、利潤の追求よりも、隣人関係における社会的地位の維持のほうを重視して、商売を行なっている、との観察結果を述べている。

第5章で著者は、共同体を共同体たらしめている諸要素について詳しく検討するために、対象をマンガライ地区内のB町内会 (RW 'B') にしぼっている。まず、世帯構成とその生計維持手段について、いくつかの事例をあげて詳述した後、世帯間のつながりについて次の3側面から詳述している。第1に、年輩の住人のほとんどはジャワの農村部からの移住民であり、故郷を同じくする人々が固まって住み着く傾向にあることが

指摘される。次いで女性のネットワークが示され、そこでは成人女性が中心的役割を果たしていることが強調されている。最後に、経済的相互依存関係が共同体意識の形成に大きく与っていることが強調されている。食料から大工までありとあらゆる生活必需品・技能が町内で調達でき、人々は非資本主義的（利益指向ではない）システムによって生活必需品・サービスを相互に供給しあっていると語る。さらに、こうした諸要素が日々繰り返されて形成されてきた共同体を支える論理が、国家の進むべき方向として支配層が想定しているものとは相容れないために、下層民は自治的であり、かつ外部社会に対しては不関与（non-participated）の態度をとるとされる。

以上のように著者は、第2章から第5章までを、都市下層地区であるマンガライ地区の調査当時の様子とそこに住む住民、特に成人女性の生活についての叙述に当てた後、第6章からは、共同体成員としての下層民と、都市支配層および彼らが想定する国家開発との関係に焦点を移している。

第6章では、都市下層地区の存在とその住民の就業形態が、支配エリート層にとっては後進性の表われと映ること、およびジャカルタの「近代的」発展につれて、都市下層民、特にその女性が従来どおりのやりかたで生計を立てることが次第に困難になってきており、その結果、若い女性は現金収入の方途を下層地区外で探さざるをえないという状況が述べられている。さらに、住み込みの女中や女工や秘書として働いている「まっとうな」女性たちの事例をいくつかあげて、彼女たちの賃金とその物欲を満足させるにはほど遠いことを指摘して、本章を結んでいる。

第7章の前半で著者は、国家にとっての売春と売春婦にとっての売春とを対比させている。国家にとって、売春とは病的な逸脱でしかなく、売春婦は矯正すべき対象である。また、法的・政策的措置を通じて、「病的に逸脱した女性たちという見捨てられた階層」（108ページ）を作り上げることによって、国家は国民のセクシュアリティを管理・支配することができるのである。一方、売春婦にとっての売春とは、下層階級の女性に開かれている選択肢の中から合理的に選択した行為である。合理的選択の結果として売春にゆき着く要

因としては、都市・農村部を問わず過度のコンシューマリズムにさらされていることと、女性の賃金が非常に低く、下層の女性が経済力を得る職業として売春があることが指摘されている。ここで著者は、自分の観察結果は、「売春は、奴隷状態や病的状態というのではなく、むしろ合理的選択にもとづく行為であり、下層階級の女性に経済的利益と社会的束縛からの自由を提供する」（108ページ）という見解を裏づけるものであったと述べている。

そして後半では、1985年当時のブロックMで活動する自己雇用の売春婦、6名の生活が描かれる。彼女たちはマンガライ地区の下層民のように共同体を形成しているわけではないが、やはり集団として独特のスタイルを形成しており、一種のサブカルチャーを成していると結論づけられている。

第8章は、資本制の浸透に対する都市下層女性の態度を整理しており、本書の要約とも言える部分である。現在では、下層階級であっても若い女性は、理想的な主婦として自分の将来像を想定するように社会化されており、共同体の一員として生きる母親の生活様式には興味を示さなくなっている。また、彼女たちの母親は、本書の前半部分で描かれているように、商売においても利潤を上げるよりも共同体における役割を果たすことを重視しているが、若い彼女たちは物質至上主義的な価値観を持っている。その結果、彼女たちは共同体から離脱して、ひとりの女性として資本制に対峙することになり、その場合には不当な低賃金労働もしくは売春に携わることにならざるをえない。一方、年輩の下層階級の女性たちは、彼女たちの生計の維持には不可欠な共同体の存在が国家からは敵視されており、常に抑圧の対象にされているにもかかわらず、著者の目には「宿命論者であり、国家に対しては受け身」（135ページ）に映ったと述べられている。

そして終章では再び、下層階級の女性たちには、与えられた環境に適応しつつ生き抜く能力が備わっていることが強調されて、本書は終わっている。

III

以上、評者の興味にしたがって内容を紹介してきた。

一般に、都市開発から取り残されてしまったような貧困地区や女性労働者の低賃金などを、経済発展によってもたらされた矛盾として告発するのはたやすい。しかし、なぜ「弱者」が創出されたのか、また「弱者」がどこに生き延びる方途を見つけているのか、こういった事実を理解しないままに、いたずらに「弱者」に対する「救済策」を主張するにとどまる場合が多い。本書は、「下層階級の女性の救済」を意図したものではないが、支配層が抱えている発展のイメージと、下層女性が築き上げてきた生活様式との矛盾、およびその矛盾を克服しようとする彼女たちの主体的適応を描き出すことによって、「下層階級の女性の救済」に結びつく理論の出発点ともなっている。

まず、善悪の価値判断ぬきにして、当事者の論理を解明し、理解すること、そしてその論理をより大きな文脈の中に位置づけること、研究におけるこうした態度の重要性を、本書は示している。

しかしながら、本書の重大な欠点は、合理的選択の帰結がなぜ売春に従事することになるのかという問いを立てなかったことにある。本書の最後で著者は、「ジャカルタは急速に変化しているために、このような簡単な研究から何らかのはっきりとした結論を引き出すのは不可能である」(140～141ページ)として、自らの研究成果を貶めてしまった。このようなことになった主要な原因は、「ジャカルタにおける下層階級の女性が経済的に期待できるもの(women's economic prospects)、および平等主義的な女性組織がないことを考慮すれば、売春は道徳主義的な家長制イデオロギー、性的抑圧、および搾取的な工場就労に対するオルタナティブを提供する」(125ページ)として、売春婦をマンガライ地区の女性街頭商人と対比しうる存在として位置づけてしまったところにある。ここで著者が見逃したのは、資本制と共同体という対立関係は成立しても、資本制と個人という対立関係は成立しえない、という事実である。マンガライ地区の女性街頭商人が資本主義的発展とは矛盾する生活形態を維持し、資本制の浸透に対して無関心でいられるのは、都市下層地区の共同体に守られているからにほかならない。一方、都市下層地区共同体を離脱した若い女性は、資本制の論理に屈服せざるをえず、低賃金労働者として

であれ、売春婦としてであれ、自らを商品として提供するほかに、生き延びる方途はないのである。したがって、下層地区の女性街頭商人の資本制下における役割と、その娘世代に当たる女性たちの資本制下における役割とは、質的にまったく異なっている。

売春を「貧困とますます商品化される(commodified)社会に対する合理的対応」(139ページ)であると結論を下すのに先だって、「合理的」という言葉の意味を吟味していれば、下層階級の女性と国家との関係の質的变化について考察することになったであろう。しかし、著者は、“物欲を満たすためには金が必要だが、売春のほうが格段に金を稼げるし、うまくいけば外国人と結婚できるかもしれない”という以上の根拠を見いださずに、「合理的」という言葉を使ってしまったために、ゆき詰まってしまった。

第6章までは、支配エリート層の抱く「真実」(すなわち資本主義的発展と「近代的」ジェンダー)と都市下層の女性街頭商人の日常生活との矛盾と、都市下層階級の共同体と資本制との対峙がしっかりと描き出されており、国家と女性との関係を考えさせられる。また、本書評では紹介できなかったが、女性街頭商人の生活もいきいきと描かれており、それだけでも十分に興味深い。それだけに、資本制下における売春の「合理性」について考察を推し進めていない点には不満が残る。

この書名、特に副題からはジャカルタの街頭商人と売春婦の営みをただ単に記述しただけのような印象を受けるが、本書は都市問題や「開発における女性」に多少なりとも興味を持つ者にとっては、全体としては得るところの多い書物であると言えよう。

(注1) 本書では、彼女たちの居住地を指すのにインドネシア語の *kampung* (カンボン) という言葉をそのまま使用している。この言葉は、「田舎」を意味するほか、都市部のあまり環境の良くない場所にある小規模住宅の密集地域を指す俗語である。インフォーマルセクターの従事者(人力車引きや露天商など)の居住地であり、マンガライ地区のように同郷の人々があつまり住んでいる場合もある。本稿では、下層地区という言葉当てをすることにする。

(アジア経済研究所経済協力調査室)